**国際関係会　総会2019年度　議事録**

**日時：6月15日(土)　15時∼17時**

**場所：三田キャンパス西校舎517教室**

**安倍会長・議長挨拶**

現在の会員数：OBOG1446名（正会員851名　準会員595名）

　定足数を上回ったので有効。

　現役の皆様との意見交換会を目的とした活動にして行きたい。

議案

1. 岩田幹事長による2018年度活動報告

昨年度と比べて２６名の会員が増加をしました。６３期は正会員８名。　総会、懇親会への参加が少ない。若い世代との乖離が生まれているのではないだろうかという疑念がある。

構成をみると３０期以降の会員数が半数を超えており、若い考え方をもってこれからのIIRの成長を図ってほしい。

**＜２０１８年度活動報告＞**

**１　国連広報センター根本かおる所長による総会・特別講演を行う**

SDGｓについての講演。その方面にどのように向上することができるのか。など

**２　就活セミナー**

どのように今後のキャリアを模索していけばよいのか

**３　スタンフォード大学との再交流**

春のプログラムが途絶えていたが、今年5回目を再開催。

**４　ＳＥＥＫ講演会（OBの方の、体験をもとにした講演）**

OBOGの体験を語るイベントを開催。１３期梶　明彦君によるビクトリアユニバーシティにいた経験・JALでの経験を忌憚なく話していただいた。

**５．HPの更新**

ここ十年の記録をHPに記載している。OB会としてHPを運営しているクラブは少ないので、IIRが続けられているのは現役の広報局のおかげ、この場を借りてお礼を申し上げます。

　（ご質問）

**●大学当局との接点というのは、あったのでしょうか。**

　　→SKIPで２週間のプログラムがあり、そのフェアウェルパーティーに国際センター長をお招きし、活動説明をしています。

**●大学とIIRとの交流はあったのでしょうか。大学はどのようにIIRと関わってきたのでしょうか。OBOG会はIIRと大学当局との関係強固に努めているのでしょうか。**

→４５０名強に現役部員が増えた以上、その関係強化を務める必要がある。その中の施策として慶應塾長に講演していただくなどのアクションを起こした。

→「デイリーベースで慶應とOBOG会が交流していることはない」しかしながら、慶應がスーパーグローバルユニバーシティに選ばれたとき、慶應との意思共有は行いました。

1. 予算監査・会計報告

IIRのOBOG会としての源泉である資金は、卒業するときに払っている会費がベースとなっております。現役の活動を財務的なサポートも、OBOG資金から出しています。したがって、今後のIIRのサポートを行うために、会費をふるってお納めください。

前石原会長からの多大な寄付をしていただきました。この資金は、通常の資金とは別に保管管理しております。

IIRの平成３０年度の監査報告に対して、認めます。　　→承認。

1. 事業企画案・予算案
   1. **事業企画案**

**・現役プロジェクトへの支援**

　IIRの活動プロジェクトが増加しており、プロジェクトごとにやりがいを感じて活動する様、尽力しております。

**・OBOGの講演会（ＳＥＥＫ）**

**・就職活動セミナー**

　若い世代たちが、どのようにキャリアプランを考えていく必要があるかを講演しております。

→新たな役員に加わって戴ける方を探しております。

* 1. **予算案**

部費・福利厚生機関としてのお金は払われているので、OBOG会としてはプロジェクトに対しての資金面での援助には今年は至っていません。　　→承認。

1. 現役の活動報告



**６５期代表　山口　開　君による挨拶**

「国際関係会がどのように活動をしているか」

　理念

　・国際社会で活躍する人材の輩出

　・義塾の国際交流の推進を実活動

　活動

　・国内での外国人の受け入れ

　・国外への部員・塾生への渡航を提供

**６５期委員長原浩志君によるIW報告**

everlasting Tokyo

→変わらないものを東京から提供をしたい

　変化の中で、「変わらないものが大切」であると感じた。IWを通して、「変わらないもの」を提供したい

IWの役割「次へのステップの提供」

→一年生の新歓的な要素を含めています。IIR活動の体験をさせていきたい

1. 国際交流の楽しさを再発見
2. オーガナイズをする楽しさを提供
3. IIRコミュニティの提供

**６５期　LINK代表　間嶋君によるLINK報告**

What makes you makes what

・国際色豊か

・高学歴化

　UBC大学から四名　トロント大学から一名を招致することが可能に

開催時期７/３～７/11

　昨年のESから体験する機会をより提供してほしいという声があったので、体験を多く提供するようにします。

　最後にプレゼンテーションを作成します

→一年生の新歓的な要素を含めています。IIR活動の体験をさせていきたい

1. 国際交流の楽しさを再発見
2. オーガナイズをする楽しさを提供

　⑶　IIRコミュニティの提供

**６５期AIM代表　飴本君からの報告**

**hello real, hello tomorrow**

**・企業訪問を三つ提供しています。日本・インドネシアの企業訪問をします。**

**・主にアクセンチュア・JTBに訪問します。**

**６５期　インド交流プロジェクト代表　園田君による報告**

自己の確立と他者への寛容性

　概要インドから留学生を招き来年2020年6/５～15日の11日間

　宗教・平等・衛生など、インドに関連するテーマを考えていきます。

**６５期SKIP代表　稗田君による報告**

broaden our perspective through Japan

　・アカデミック班の導入をしました

　→一つのテーマの企画を二日三日単位で用意することでより深い理解をもたらす。

　参加者は18名

　・9/1～9/14に行います

　・最終プレゼンテーションを行います。

**６５期PAL代表　岩瀬君による報告**

paint your color, find your Asia.

　・国籍の多様化。様々な多様性を持った外国人と交流することで自分なりのリーダーシップを見つけていけるプロジェクトを目指します

　・奨学金の提供

　・参加費の減額

8/2～8/11

　セブンイレブン・三井不動産などの企業に訪問をおこないます。

→一年生の新歓的な要素を含めています。IIR活動の体験をさせていきたい

１　国際交流の楽しさを再発見

２　オーガナイズをする楽しさを提供

　３　IIRコミュニティの提供

**質問**

**●どこの外国人と交流をしているのでしょうか**

　→海外から日本に来る外国人との交流をしています。

**●日本に在住している外国人との交流はしていないのか**

　→IIRとしては行っておりません。他の学生団体がその活動を行っています。

来年度の総会は2020年の6月20日を予定しております。是非ご参加ください

**慶應義塾　長谷山　彰　塾長　特別講演　「グローバル化の中の慶應義塾」**



**始めに**

　名誉会長伊勢様には2015年雑誌「塾員山脈」に登場いただき、IIR時代に経験したことが記載されていました。入学式で一年生に「塾員山脈」を渡していたのですが、その時伊勢様のページを拝読しました。塾生へのメッセージが載せられており、「変化の時代に人にかかわること・人と深くつながることが必要」だと伝わっていた。それに勝るメッセージは伝えられないが、今回は「現役塾生」にどのような行動をとってほしいかの演説をしたい。また、国際化という枠組みをこれから考えていきたい。

**慶應義塾・ＩＩＲの歴史　（ＩＩＲ創立５０周年記念誌から引用）**

戦後は米軍に占領されていた。IIRが発足したころは、戦後の影響が強かった。その影響の下、日米の学生と学生の交流が生まれたのは素晴らしい。学生の力によって、交換留学を行いたいとの手紙が来たが、資金の面からも難しかった。しかし、ダンスパーティーを行い、お金を集めるなど努力をしました。第一期生は米軍の軍用機を使って出発し、到着したのもアメリカの米軍基地がある砂漠であった。

**国際交流について**

先方の目的は「国際交流を大事にしてほしい」というものだった。ここからわかるのは、教職員が一歩離れたところからサポートしている事、清岡暎一教授の回想では「私は学生の行動には口出さない様にしている。なぜなら学生は思っているよりも有能だからだ。学生団体が大学の当局と対等に渡り合っている。この行動はさすが慶應だと思わせるには十分なものだ。これこそ、自立しているといえる。」

**福沢諭吉の学校論・教育論**

学校は人にものを与えるものではない。学生がどのように能力を開花するかを手助けするものである。これは人材教育全体の独立自尊を持った学生を育てるというテーマに合致している。学問を納めて、世の中の流行に惑わされるのではなく、行動することが必要だ。

**慶應義塾内の国際交流**

IIRの一期生から始まり、スタンフォードから始めてUBCなどの大学との交流をしています。慶應義塾は国際性が低いという評価を受けているが、国際指数には二つの基準がある。外国人教員の数・留学生の数だが、慶應義塾大学は相対的に低くなっている。2013年にグローバル推進を目的とした大学を採択した。これらの数値の推移はどうなっているのか。2013年から2018年にかけて増加している。しかし、国際化には量の確保も大事だが質の保証も必要である。交流後「慶應義塾大学のよき理解者」になってもらうことが必要である。

**慶應義塾から世界の大学に飛び立った僧の話。**

円覚寺の館長を務めたことがある僧が、仏教の本源を学びたいと主張し、福沢諭吉からの支援を受けて、留学生として派遣された。このような学生を増やすことが、学生・国際化の質を増加させている。

**義塾が始めた留学制度**

朝鮮からの留学生を受け入れた慶應は日本の大学で初めて、留学生を受け入れた大学である。昨今も海外からの留学生を招待している。二年前にUBCの学生を招待し、野球の試合を行った。そのように體育會をベースとした国際交流も行っている。

又3月22日、オックスフォード大学のバイオリン講演を行っている。このイベントも慶應義塾大学生の学生が開催している。

**グローバル化の中での慶應義塾大学**

大学にとってグローバル化とは、共通ルールによる平均化の波であると捉えている。それに対応するには世界標準に適応しなくてはならない。しかしこれだけなら埋没化をしてしまう。よって個性を持ち、長所を伸ばさなくてはならない。研究力を上げていかなくてはならない。しかし挙げることだけを目指すならば、医学部と理工学部だけで良い。しかし慶應は「全ての分野に、専門的に特化した学生を成長させたいから」そのためには、日本を多面的に理解することが必要である。

若者の内向き志向。学生生活の実態調査をすると、留学志望はするが、実際に行く人が少ない。「就職活動への影響と資金」への不安が原因として挙げられる。その不安を解決するために交換留学をしている。

**最後に**

**「世の中に最も大切なものは人と人の交わりである。これは一つの学問である」**という福沢諭吉の言葉を取り上げる。福沢は、人間（じんかん）交流を大事にしている。彼は、講演会で「民主主義の源泉はスピ―チである」と述べた。彼は週に一回演説会や討論会を行った。これこそ「異文化交流・国際交流」の利点である。「平和とは与えられるものではなく、築き上げていくものである。若い時に結んだ友情ほど大事である」**「IIRの学生よ、常に創造的であれ」**この言葉を最後にして、終わりにさせていただきます。

**質問**

**●色々な学生をとっているようだが、学生と交流することが難しいという現象があります。また討論をすること等ができないので「異文化の衝突」などが感じます。この現状にどのようにお考えですか。**

　→その通りだと思います。慶應の中では小さな国際交流の輪が、いくつかあるが、その輪の裾野を広げることで、国際交流の輪を広げていきたいと考えています。また自分たちはどのように活動できるだろうと考えることを求めます。

　また討論会を開くにあたって、アクティブラーニングに先走るのではなくて、パッシブラーニングの必要も大切だと思っています。

講演概要　以上

作成　６５期広報局局長　武藤匠吾

編集　岩田紘行　１３期

2019.7.29